



新連載

感染対策担当者に任命ですか?!

「新型コロナウイルスの影響で感染係になった」「新しく病棟のリンクナースになった」とこの春に新しく感染対策担当者に任命されたあなたのために企画しました。感染対策の定番知識をばっちり解説します!

予防策の基礎

医療法人八女発心会 姫野病院 感染対策室長（感染管理認定看護師） 中西穂波

標準予防策といえば…

感染予防対策の基本にして王道！これがなくちゃ感染対策は始まらない

■“感染”から身を守るために最も重要な対策

標準予防策とは、患者および医療従事者などすべての人を感染から守るための基本的な予防策であり、その基盤は「感染症の有無に関わらず、あらゆる人の汗を除くすべての湿性生体物質、傷のある皮膚、粘膜には感染の可能性があるもの」とみなして取り扱う¹⁾という考え方にある。

人は未検査状態や検査結果が陰性の場合、感染対策が無防備になりがちである。しかし医療施設では全患者に感染症の検査を行っているわけではなく、検査を実施した場合でも、ウィンドウ・ピリオド期（感染していても検査で陰性と出してしまう期間）や、検査法がない未知の感染症であることも否定できない。つまり検査結果だけで感染症の有無を判断することは危険であり、人は何らかの病原体に感染しているかもしれないという前提で対応しなければならない。

湿性生体物質や傷のある皮膚、粘膜には一般的に病原体を含んでいる可能性が高い。そのため、それらに接触したり目や口や鼻に入る可能性があ

表1▶標準予防策の基本的な知識

標準予防策とは
<ul style="list-style-type: none"> すべての人に実施する予防策。 湿性生体物質、傷のある皮膚、粘膜は、すべて感染性があるものとして取り扱う。
湿性生体物質に含まれるもの
<ul style="list-style-type: none"> 血液、尿、便、鼻汁、唾液、痰、消化液、精液、腔分泌液、羊水、母乳、胸水、腹水、心嚢液、脳脊髄液など。 傷や湿疹・発赤がある皮膚、粘膜。
標準予防策の主な項目
<ul style="list-style-type: none"> 手指衛生、個人防護具、呼吸器衛生/咳エチケット、患者配置、使用器材・器具の処理、環境整備、リネン類、安全な注射手技など。

(文献4より作成)

る場合には、必要な個人防護具（手袋、マスク、プラスチックエプロン、ゴーグル、フェイスシールドなど）を着用し、終了後には手指衛生をしっかりと行うことが重要である。つまり自身が行う行為によって、どのような曝露リスクがあるかを予測し、防止策を講じなければならない（表1）。

医療関連感染を防ぐため職員一人ひとりが標準予防策を意識して実践できるよう指導し、周知し

ていくことが感染対策担当者の責務であるといえる。

合わせて知っておきたい言葉

手指衛生の5つのタイミング

手指衛生は医療関連感染を防止する最も基礎的な、しかし最も重要な手段である。WHO（世界保健機関）は「手指衛生の5つのタイミング」²⁾として①患者接触前、②清潔・無菌操作前、③体液に触れた後、④患者接触後、⑤患者周囲物品の接触後を提示している。実際のケア場面において、必要なタイミングで確実に実施することが大切であり、どのタイミングで手指衛生を実施するかをイメージさせる指導を心掛けねばならない。

経路別予防策といえは…

感染経路をシャットアウト！ 標準予防策にカスタマイズする対策

■標準予防策だけでは防げない場合のさらなる防御策

標準予防策を実施すれば多くの医療関連感染が予防できるが、標準予防策だけでは防げない感染症もある。そのため特定の感染症や微生物の感染経路を遮断する目的で、感染経路別予防策を標準予防策に追加して行う必要がある。

感染経路には「接触感染」「飛沫感染」「空気感染」がある。接触感染は、患者の皮膚や粘膜、手指の汚染から感染する「直接接触感染」と、医療器具や環境表面を介して感染する「間接触感染」がある。また飛沫感染は、飛沫（しぶき）が咳やくしゃみなどにより飛散し、その飛散した飛沫を吸引することで感染が起こる。空気感染は、空气中に浮遊する飛沫核を吸引して起こる感染である。

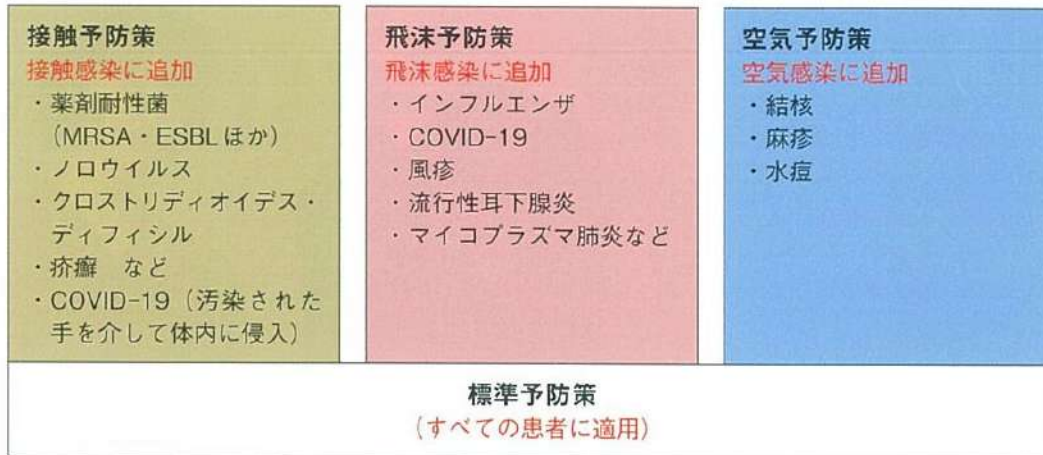
感染症によっては、この感染経路が一つとは限らない。たとえば新型コロナウイルス感染症の場合は、「飛沫予防策」と「接触予防策」を組み合わ

せた対策が必要となる。また密閉された室内などでは飛び散った飛沫が浮遊し、それを吸い込むことで感染する可能性も示唆されている。そのような特定の感染症や微生物の感染経路を考えて複数の経路別予防策を組み合わせて実践する必要がある（図1）。

先にも述べたが、経路別予防策は標準予防策に追加して実践することが最も大切である。もし飛沫予防が必要な病室で、スタッフがサージカルマスクとゴーグルだけで排泄介助を行っていた場合は、標準予防策の観点から排泄物曝露リスクを考え、手袋やプラスチックエプロン着用と終了後の手指衛生が必要であると説明を行う。

経路別予防策を実施する場合は、予防したい感染症の主要な感染経路に合う対策を選択し、またそれ以外の感染経路に対して標準予防策で対応することが最も重要であることを全職員が理解し実践していかなければならない。

図1▶経路別予防策の分類



(文献4、7より作成)

合わせて知っておきたい言葉

「隔離予防策のためのCDCガイドライン2007」¹⁾

1996年にCDC (米国疾病管理センター) から公開されたガイドラインで2007年6月に改訂された。このガイドラインには感染対策基本の標準予防策と感染経路別予防策の重要性を強調しており、医療関連感染の減少や医療の質の向上と医療の効率化など、今日における医療関連感染対策の基本となっている。

引用・参考文献

- 1) 満田年宏訳. 隔離予防策のためのCDCガイドライン2007. 東京, ヴァンメディカル, 2007, 1-123. <https://www.cdc.gov/infectioncontrol/pdf/guidelines/isolation-guidelines-H.pdf>
- 2) WHO. SAVE LIVES-Clean Your Hands. <https://www.who.int/campaigns/save-lives-clean-your-hands>
- 3) 坂本史衣. 基礎から学ぶ医療関連感染対策. 改訂第2版, 東京, 南江堂, 2014, 1-49.
- 4) 遠藤泰子. 基本的な知識セット. INFECTION CONTROL, 26 (4), 2017, 29-39.
- 5) 坂本史衣. 感染対策40の鉄則. 東京, 医学書院, 2016, 50-3, 86-96.
- 6) 小林寛伊監. 病院における隔離予防策のためのCDC最新ガイドライン. 向野賢治訳. インフェクションコントロール1996年別冊. 大阪, メディカ出版, 1996, 88. (Garner JS, Hospital Infection Control Practices Advisory Committee, CDC : Guideline for isolation precautions in hospitals, 1996. Infect Control Hosp Epidemiol 1996 ; 17 : 53-80, and Am J Infect Control 1996 ; 24 : 24-52.)
- 7) 山中直子. 感染経路別予防策. INFECTION CONTROL, 24 (4), 2015, 28-33.